
山田伸時 / 後藤智花

松本 由樹彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山田伸時／後藤智花

【Nコード】

N8693J

【作者名】

松本 由樹彦

【あらすじ】

16歳の山田伸時と後藤智花は、小1の秋の遠足の前の日から付き合っている。死んだカラスを見たり、輪ゴムを飛ばしたり、古いセロテープを探したり、している。

1 公園の木の下でカラスが死んだ

公園の木の下でカラスが死んだ。

騒々しいカラスが好きではないから、毎日、死んだカラスを見ている。

冬の寒さはやがて訪れる腐敗からカラスを遠ざける。黒い羽衣を保つカラスは日毎少しずつ枯れ葉に埋まる。ひどく冷えたクリスマスの翌朝、この街にも雪が積もった。その日も僕は、死んだカラスを目撃した。綿雪をまとった死んだカラスは痛々しいほどみすばらしくて、目を向けているのが辛かった。頭上の物音に顔を向けると、そこにもカラス。生きたカラスが何十羽と、枝に爪を立てていた。僕は長靴の底で幹を蹴った。一羽くらい落ちてきても良さそうなものなのに、カラスは残らず汚れた空へと飛び立った。飛べないのは死んだカラスと、僕くらいだ。僕はマフラーの片側を強く引いて、十秒間呼吸を断絶した。死ぬ気はないから、死を思わない。

身体が冷たくなっていたので、四十五度のシャワーを浴びた。濡れた髪をバスタオルで拭きながら家を出て、隣の家キッチンへ。
智花がパンを食べていた。智花はパンを飲み込んだ。僕は智花の前に座った。

「お風呂に、入っていたの？」

「雪が積もってる」

「知ってるわ」

智花は指に付いたパンくずを払い落として、マグカップを手にとった。デフォルメされた像のイラストが描かれている、黄色いマグカップ。僕の家には同じものの赤色がある。智花は湯気を立てるカップにそっと口をつけた。

僕は飴色の食器棚からファーストキッチンのロゴが入ったカップを出して、コーヒーマーカーからコーヒートを注いだ。智花の前に戻

り、コーヒーを飲んだ。肅々とパンを噛む智花の頭の向こうにはライムグリーンの電波時計。八時二十一分と八時二十二分の間。僕はコーヒーを飲みながら、智花の顔を見る。しばらく会っていないかった気がする。いつ以来だろう。中庭にいるのを見かけたのが終業式の前の日だったから、五日ぶり。あのときは『智花がいる』と認めただけだ。では、言葉を交わしたのは、いつ以来だろう。記憶をたどるが、何も見えない。十日ほど前に僕の家夕食を食べに来たような気もするが。食べに来たと思う。どうして来たのか、何を食べたか、それはもう、誰も知らない。

朝食を食べ終わると、智花は食器とカップを台所へ運んで、手早く洗い物を済ませた。タオルでよく手を拭いて、部屋を出ていった。僕はコーヒーを最後まで飲んだ。最後まで飲むともう少し飲みたくなったから、コーヒーをもう一杯飲んだ。それからカップを洗って干して、口をゆすいだから、手を洗った。バスタオルでよく口と手を拭いて、二階へ上がった。

智花は服を着替えていた。山吹色のセーターを着ていた。椅子に座って、何もしていなかった。僕は窓際に立ってカーテンを開けた。屋根に積もった雪が光ってまぶしかった。智花に、雪を見るか、と訊いた。智花は返事をしなかった。僕はひとりで雪を見ていた。雪を見ながら、智花のことを考えた。

「寝るから」

智花が椅子から立ち上がった。セーターを脱いで白いタンクトップ一枚になり、上からボーダー柄の長袖Ｔシャツを重ねた。

「眠たいの？」

「眠たいの」

智花はベッドにもぐり込んだ。

僕は椅子に座った。

「死んだカラスを、見てきたの？」

僕はうなずいた。智花は僕に背中を向けていたけど、それでわかると思ったから。

「雪を、かぶってた？」

僕はうなずいた。

「きれいだった？」

僕は首を振った。

「そう」

智花は寝返りを打った。目は閉じられていた。

2 部屋を暗くしてテレビを見ていた

部屋を暗くしてテレビを見ていた。満州国のドキュメンタリーを見ていた。

智花とエリカが僕の部屋に入ってきて、智花が勝手に電気をつけた。僕はテレビのボリウムを絞った。

エリカの首輪には荷造り用のビニール紐が結わえられていた。「散歩」

智花はビニール紐を手から放した。

エリカはホットカーペットを駆け回り、空気清浄機の電源ケーブルに噛みついた。

智花は僕のベッドに腰を下ろした。身体の両脇に手について、カーテンを眺めた。

「外が見たい？」

「エリカ」

智花に呼ばれて、エリカは智花の足に顔をこすりつけた。智花はエリカを見なかったけど、エリカの首の後ろを撫でた。

「その番組はなに？」

「満州国のドキュメンタリー」

「昔の中国ね」

「そう。でも少し違うみたいだ」

「どう違うの？」

「それがわからないから見ている」

「その番組を見ると、満州国のことがわかるの？」

「それはわからない」

「エリカ」

智花はエリカの両脇に手を差し込んで抱き上げた。ベッドのスプリングがきしみを立てた。

「智花はエリカが好き？」

「わたしはエリカが好き」

「どうしてエリカが好き？」

「わたしの犬だもの」

「エリカは豆大福が好き？」

「エリカは豆大福が好き」

僕は智花とエリカに豆大福を与えた。智花とエリカは豆大福を食べた。智花とエリカは口が真っ白になった。

満州国のドキュメンタリーが終わった。満州国のことはわからなかった。

「満州国のことは、わかった？」

「何もわからない」

僕はテレビを消した。聞こえるのはエリカの呼吸音だけになった。

「エリカははあはあ言うね」

「エリカははあはあ言うわ」

「智花ははあはあ言わないけど」

「私は犬じゃないもの」

「犬じゃないから、はあはあ言わないの」

「そういうわけでもないわ」

「言ってみてよ」

「はあはあ」

「智花も、はあはあ言うね」

「伸時は、しんじはあはあ言わないの」

「言うときもある」

「言ってみて」

「はあはあ」

「伸時も、はあはあ言うときがあるのね」

「人だから」

エリカは喉が渴いているようだが、水がなかった。

3 智花がペットボトルのふたを集めているから僕も集めている

智花がペットボトルのふたを集めているから僕も集めている。

缶のジュースよりペットボトルのジュースを買っし、人が飲んでいたらもらう。ゴミ箱に入っていると拾う。三十個集まると、洗面器にお湯を張って、古い歯ブラシできれいに洗って、一日外に干してから、袋に入れて、智花の家に持っていく。

昨日で三十個集まったから、洗面器にお湯を張って、古い歯ブラシできれいに洗って、ざるに入れて外に干して、袋に入れて智花の家に持っていった。

智花は部屋にいた。星占いをしていたが、僕が入ってくると僕を見た。

「ペットボトルのふたを持ってきた」

「ちょうだい」

智花は右手と左手をくつつけて上に向けた。僕は智花の手にペットボトルのふたをひとつずつ置いていった。智花の手は小さいから、ペットボトルのふたは十四個しか載らなかった。残りの十六個は袋に入れたまま、智花の机の上に置いた。智花は手の上のペットボトルのふたを袋に戻した。

「これを見て」

智花は引き出しの中から白い紙を出して僕に渡した。紙には『後藤智花さまのおかげで2・7人分のワクチンができました』と書いてあった。

「ペットボトルのふたから、ワクチンができたみたい」

「ワクチン」

「ポリオワクチン」

僕は智花に紙を返した。智花は紙を引き出しの中にしまった。僕は絨毯に座った。智花も絨毯に座った。正座をした。

「ペットボトルのふたは、ポリオに効くの？」

「そうみたい」

「どのメーカーが、一番効くの？」

「たぶんだけど、サントリー」

「チエリオは、効かないの？」

「チエリオは、ポリオには効かない」

「チエリオは、何に効くの？」

「わからないわ」

智花の髪には、寝ぐせがついていた。僕は自分の髪をさわった。僕の髪にも、寝ぐせがついていた。

「ワクチンは、誰が使うの？」

「外国の子どもよ」

「ワクチンは、注射なの？」

「飲み物よ」

「僕と智花は、子どものころに、ワクチンを飲んだの？」

「わたしは飲んだけど、伸時は飲んでない。だからポリオになる」

「僕はポリオになる」

「伸時はポリオになる」

「ならないためには、サントリーを飲むしかない」

「そう。それも絶対じゃない」

僕は絨毯から立った。

「帰るの？」

僕はうなずいた。

「サントリーを買うの？」

僕はうなずいた。

「ワクチンを買えばいいわ」

4 学校に行く前に公園に行って死んだカラスを見てきた

学校に行く前に公園に行って死んだカラスを見てきた。

今日は晴れていたから、死んだカラスの毛もやわからかそうに見えた。さわったら硬くて冷たくて、目がどこにあるかわからなかった。腐敗は遠い。

休み時間に宮下^{みやした}と話していたら、宮下が、サッカー部に入らないか、と言った。

「どうしてサッカー」

「おれは三組の川口が好きだ」

「三組の川口」

^{かわぐちこみ}
「川口心美」

「三組の川口は、サッカー部なの」

「サッカー部のマネージャーだ」

「宮下は三組の川口が好きで、三組の川口はサッカー部のマネージャーだから、サッカー部に入る」

「そうだ」

「宮下は、三組の川口と仲がいいの」

「喋ったことがない」

「どうして、喋ったことがないのに、三組の川口が好きだとわかるの」

「喋ったことがないから、喋りたいと思う。だからサッカー部に入って、川口と喋る」

「なるほど」

僕は椅子から立った。

「三組に行ってくる」

僕は三組に入った。誰が川口かわからなかったから、近くにいた女子三人に話しかけたら、三人のうちのひとり、あたしが川口心

美なのだ、と言った。

「川口さんは、サッカー部のマネージャーなの？」

「そうだけど、きみは二組の山田くんね^{やまだ}」

「そうだけど」

「四組の後藤智花さんと付き合ってる」

「そうだけど」

川口は僕を見た。僕も川口を見た。

「今日から僕は、サッカー部に入る」

「本当？」

「宮下と一緒にいる。僕は足が速いけど、宮下は背が高い」

「あたし、宮下くんも知ってる」

僕は二組に戻った。

僕と宮下はサッカー部に入った。一月の新入部員はめずらしいと言われた。宮下は背が高いからセンターバックになって、僕は足が速いから右サイドバックになった。サッカー部の練習をしていたら、帰る時間が遅くなった。宮下はまだ川口と喋ってない。僕は川口とときどき喋る。

サッカー部に入って一週間が過ぎて、僕はサッカーの練習をしてから、宮下と豚丼を食べてから、家に帰った。

家で、父さんと、智花の父さんと、智花が、ポーカーをしていた。ポーカーで負けるとデコピンをされるから、智花の額が赤く腫れていた。

「痛そう」

「痛くないわ」

僕は智花の隣に座った。智花の父さんが、伸時くん伸時くん、最近帰ってくるのが遅いね、と言った。僕は、サッカー部に入っただけ、と答えた。

智花が、カードを一枚すり替えた。

「だから、この頃帰ってくるのが遅いのね」

僕はうなずいた。

「伸時は、三組の川口さんが好きなの？」

僕は首を振った。

「僕は好きじゃない。宮下は好き」

「宮下くんは、三組の川口さんが好きだから、サッカー部に入った」

「宮下は、三組の川口が好きだから、サッカー部に入った」

「どうして、伸時は、サッカー部に入ったの？サッカーが好きなの？」

「わからない。サッカーは好きじゃない」

「どのポジションを、やっているの？」

「右サイドバックの控え」

父さんが、父さんも昔、右サイドワックだったんだよ、と言った。智花の父さんが父さんを見た。

「右サイドワック？」

僕も父さんを見た。

「右サイドワック？」

智花も父さんを見た。

「おじさんは、いつも嘘ばかり」

智花はワンピースで、父さんはツーペアで、智花の父さんはストリートだった。智花は前髪を手で押さえて、思いつき目をつむった。智花の父さんが智花に思いつきデコピンをした。父さんが智花に思いつきデコピンをした。僕は智花に思いつき輪ゴムをぶつけた。

「いたっ」

智花は目を開けて、額をさすった。

「いまのは、痛かった」

「いまのは、父さんだよ」

智花は、父さんをにらんだ。

父さんは、トランプを配った。

「智花ちゃんも、サッカー部のマネージャーになればいいのに」

「わたしは、サッカー部のマネージャーにはならないわ」

「智花ちゃんは、どうしてサッカー部のマネージャーにならないの？」

「帰ってくるのが遅くなると、エリカの散歩に行けないもの」

智花はストレートフラッシュで、父さんはツーペアで、智花の父さんはストレートだった。父さんは目を閉じて、服の袖を前歯で噛んだ。智花の父さんが父さんに思いっきりデコピンをした。僕は父さんに思いっきり輪ゴムをぶつけた。智花は父さんに思いっきりテレビのリモコンをぶつけた。父さんの頭からたらたらと血が流れた。僕は父さんの頭にティッシュを貼った。

智花の額にもティッシュを貼った。

5 学校にいるときに退屈なので寝てた

学校にいるときに退屈なので寝てた。

起きたら放課後になっていた。僕の前の席に智花が座っていた。

教室の中なのに、智花は首にマフラーを巻いていて、手に手袋をはめていた。

「わたし、困ってるの」

「何を、困ってるの？」

智花は窓の方を指さした。

「雨が降っているわ」

僕は窓の外を見た。窓に水滴が付いていて、アスファルトに水が浮いていた。

「伸時の傘を、貸して」

智花は僕の机の横のフックにひっかけてある傘を掴んだ。

「傘は、貸さない」

僕は智花が持ち上げた傘を掴んだ。智花は眉をひそめた。

「どうして、傘を貸してくれない」

「智花に傘を貸すと、帰るときに僕が濡れるから」

「でも、伸時に傘を貸してもらわないと、帰るときにわたしが濡れるわ」

智花は腕を組んだ。傘は一本しかない。僕は腕を組んだ。

「僕の傘に、二人で入って帰る」

「それだけは、絶対にいや」

「どうして、それだけは、絶対にいや？」

「中学生のとき、わたしと伸時が一緒の傘で学校に行ったら、みんなにひやかされた」

「うん」

「わたしは、あのとき、すごくいやだった」

「僕も、あのとき、すごくいやだった」

「だから、傘を貸して」

智花は僕が握っている傘を掴んだ。

「傘は、貸さない」

僕は智花が掴んだ傘を引っぱった。智花はがくんとなっていた。

「でも、伸時が傘を差していて、わたしが傘を差していないと、伸時はひどい男だと思われるわ」

「僕が傘を差していて、智花が傘を差していないと、僕はひどい男だと思われる」

僕は想像した。

「それでもいいの？」

「よくない」

僕は傘を持つて、椅子から立った。

「僕がひとりで家に帰って、智花の傘を持つてくる。二人とも濡れない方法は、それしかない」

「二人とも濡れない方法は、それしかないわ」

智花はマフラーの端を持つて、首の周りを回してほごいた。

「わたしのマフラーをしていく？」

「いい」

智花はマフラーを巻き直した。

「ここで待つてる」

僕はひとりで傘を差して外に出た。雨は強く降っていた。僕は急いで帰ろうとしていたので、膝から下が濡れた。風も吹いていて、体の横側もよく濡れた。公園の前にさしかかったとき、死んだカラスが濡れているところを見なくなった。僕は木の下に行った。木の下は土だから、靴が泥だらけになった。死んだカラスは溺れて死んだカラスみたいになっていた。肩から胴にかけての膨らみが目立っていた。黒い毛は普段よりも尖って硬そうで、くちばしは溶けかけのつららのようだった。僕は濡れている死んだカラスが濡れていないところを見てみたくなかったから、死んだカラスに傘を差した。死

んだカラスが乾く前に、僕は僕が濡れていることが嫌になったのと、智花が待っているので家に帰った。

家に帰って、乾いたタオルで頭を拭いた。制服から私服に着替えた。外に出て、智花の家に行つて、智花の傘を持って玄関を出ると、雨が上がっていた。

僕はドアノブに傘をかけた。傘をかけて考えた。

もう雨は降っていないから、学校に傘を持っていくと、智花は使わない傘を持って帰ってこないといけない。だから傘を持っていく必要はない。持っていくと邪魔になるから。でも智花はここで待つてると言つたから、僕が傘を持っていかないと帰れない。だけど使わない傘を二本も持つて学校に行くのは嫌な気がするし、私服で学校の中に入ると、もしかしたら、先生に怒られるかもしれない。でも智花は僕が来ないと帰れない。明日は土曜日で、明後日は日曜日だから、智花は月曜日まで帰れない。智花が帰ってこないと、エリカが散歩に行けない。

僕は学校に行くことにした。先生に怒られるといけないから、もう一回制服に着替えた。それから傘を二本持つて家を出た。

教室に着いたけど、誰もいなかった。

「智花」

智花は返事をしなかった。

僕は智花に電話をした。智花は電話に出た。

「もしもし」

「もしもし」

「伸時はいま、どこにいるの」

「学校に帰ってきた」

「そう」

「智花はいま、どこにいるの」

「家に帰ってきた」

「そう。傘は」

「もつからない。雨が止んだから、エリカの散歩に行くわ」

電話が切れた。

6 土曜日の昼に父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんと智花と僕で中

土曜日の昼に父さんと母さんと智花の父さんと智花の母さんと智花と僕で中華料理を食べにいった。父さんと母さんと僕は僕の家の中に乗って行って、智花の父さんと智花の母さんと智花は智花の家の車に乗っていった。

中華料理の店は混んでいたもので、二十分待った。待っている間、母さんと智花の母さんと智花はアロエの棘の話をしていて、父さんと智花の父さんはジャンプを読んでいた。僕は座る椅子がないので、立っていた。

テーブルに案内されて座っていると、水を持ってきたチャイナドレスのウェイトレスが、後藤さん、と言った。僕は智花の父さんか智花の母さんか智花のことだろうと思ったが、智花のことだった。

智花はウェイトレスを見た。

「レイ・ホウライ、ここで何をしている」

「ここは、ワタシの親戚が経営しているレストラン」

レイ・ホウライは微笑んで、全員の前に水を置いた。

「後藤さんの、ご家族？」

「二人はそう。あとの三人は違う」

智花はひとりずつを指さした。

「お父さん、お母さん、伸時のお父さん、伸時のお母さん、伸時」

「山田伸時くん。二組の」

僕はうなずいた。

席が空くのを待っていた間に注文する料理を決めていたので、すぐに注文した。厨房に戻っていくレイ・ホウライの脚を見ていた父さんが、水を飲んだ。

「今度、智花ちゃんにも、チャイナドレスを買ってあげるね」

「わたし、この中でおじさんが一番嫌い」

智花の父さんが智花に、智花ちゃん智花ちゃん、レイ・ホウライ

ちゃん是中国からの留学生なの、と訊いた。智花は首を振った。

「日本人。宝来玲^{ほうらいれい}。同じクラス」

「どうして、レイ・ホウライって呼ぶの」

「なんとなく、言ってみただけ」

レイ・ホウライが中華料理をたくさん持ってきた。僕の家族と智花の家族は中華料理をたくさん食べた。

智花の母さんがビールを飲みながら僕に訊いた。

「伸時くんは、どうして今日は、一言も喋らないの」

「怒っているから」

「どうして、伸時くんは怒っているの」

「昨日、学校に傘を持っていったのに、智花が帰っていたから」

「わたしがいけないの」

智花がしょんぼりした。みんなもしょんぼりした。

「わたしは、雨が上がったから、伸時はもう来ないと思っていた。

でも伸時は来た」

「智花は、ここで待つてゐるって言ったのに、待つてなかった。僕は、使わない傘を二本持って学校に戻って、何もしないで帰ってきた」

「ごめんなさい」

「許さない」

「そんなに、怒らなくてもいいじゃない」

「もう智花には、傘を持っていかない」

「もう伸時には、傘を持って来てって頼まない」

「ばか」

「ばか」

智花の父さんが智花の母さんに、お母さんお母さん、伸時くと智花ちゃん、どっちが悪いの、と訊いた。

「伸時くんは、智花が思ってるよりも偉かったの。でも智花の方が、偉いところもあるの。だから、伸直りをしたほうがいいわ」

「わたしは、もともと伸時のことが好きじゃないわ」

「僕も、もともと智花のことが好きじゃない」

「ばか」

「ばか」

母さんがため息をついた。

「あれしかないわね」

智花の母さんもため息をついた。

「あれでいくわ」

母さんが手をあげた。

「レイ・ホウライちゃん、長いお箸を貸してちょうだい」

レイ・ホウライが長い箸を持ってきて、母さんに渡した。智花の母さんが肉団子の皿をテーブルの真ん中に移した。母さんが僕に長い箸を渡した。

「肉団子を二つに割って、半分を智花ちゃんに食べさせなさい」

「どうして」

「昔の中国では、仲直りのときにそうしたのよ」

「わたしは、そんな団子食べないわ」

智花は拗ねて横を向いた。

「早くしなさい」

母さんがテーブルを叩いた。

僕は長い箸で肉団子を半分に割って、片方を挟んで持ち上げて、智花の顔の前に出した。

智花は食べてくれなかった。

「智花ちゃん智花ちゃん、食べてあげて」

「智花ちゃん、仲時の肉団子食べてあげてよ」

「智花ちゃん、本当は仲直りしたいでしょ」

「あんまり言うと、智花は食べないわよ」

ずっと腕を上げていたら、僕の腕が震えてきた。

「智花、腕が痛い」

智花は肉団子を食べた。僕は長い箸を置いた。

「これで、仲直り」

智花は肉団子を飲み込んで喋った。

「これで、仲直りね」

「まだよ」

智花の母さんが僕と智花の間に手を出した。

「まだ肉団子が半分残っているわ」

「これは、わたしが伸時に食べさせればいいの？」

智花の母さんは首を振った。

「これを智花が投げて、伸時くんがお口でキャッチできたら、仲直り成立。できなかったら、もう一回やり直し」

「難しそうだけど、たぶん、伸時はキャッチするわ」

「たぶん、僕はキャッチする」

僕は椅子から立った。智花も椅子から立った。肉団子を手で掴んだ。

「手が汚れたわ」

「あとできれいに拭きなさい」

「はい」

「智花ちゃん、ピッチャーびびってるよ」

「おじさんは、黙ってて」

僕は口を大きく開けた。智花は胸の前に手を合わせて肉団子を握って、振りがぶって、片足でジャンプして、腕を振った。僕はヘディングで肉団子の軌道を反らした。肉団子は窓に当たった。窓に肉片がへばりついた。

「ナイスヘッドね」

智花は手を拭いた。椅子に座った。

「いまのは、いままで一番いいヘッドだった」

僕は額を拭いた。椅子に座った。

「残念だけど、ヘディングじゃ仲直りは認められないわ」

智花の母さんが新しい肉団子を半分に割った。

「でもお母さん、伸時はサッカー部に入ったのよ」

「伸時くんは、サッカー部に入ったの？」

僕はうなずいた。

「だったら、ヘディングの方が、なおいいわ」
「だったら、わたしと伸時は、仲直りしたの」
「智花と伸時くんは、仲直りした」
「よかったわ」

7 宮下と森下が僕の家遊びに来た

宮下と森下が僕もりしたの家に遊びに来た。僕の部屋でペプシを飲みながら座まって話をしていたら、宮下と森下がつまらないと言い出した。

「女の子を呼ぼう」

宮下が右足を伸ばした。

「智花ちゃんを呼ぼう」

森下も右足を伸ばした。

「智花を呼んで、何をするの」

「智花ちゃんを、野球拳で脱がしちゃう」

宮下と森下は握手をした。僕は握手をしなかった。

「今日は日曜日だから、智花は寝てるかもしれない」

宮下が時計を見た。

「もう二時だ」

僕も時計を見た。一時五十九分だった。

「一時五十九分だ」

「ほとんど二時だ」

「智花は、日曜日は朝ごはんを食べて寝て、昼ごはんを食べて寝て、夜ごはんを食べて寝ることが多いから、いまも寝てるかもしれない。それにいまは冬だから、服を脱いだら寒いと思う」

「いいから、呼んで来いよ」

森下がペプシをコップに注がずに、ボトルに口をつけて飲んだ。

僕は行儀が悪いと思ったので、森下の目に指を刺した。森下が、うぎゃあ、と叫んだ。宮下が、森下、と叫んだ。僕は絨毯から立って、部屋を出て、智花の家に行った。

智花の家の一階には、智花の父さんと智花の母さんとエリカがいたけど、智花がいなかった。僕は二階に上がって、智花の部屋のドアを開けた。エリカが僕のあとをついてきたけど、僕はエリカを部屋に入れなかった。

智花は部屋の中にいて、寝てなかった。黒い服を着て、椅子に座っていた。僕は智花の隣に立った。智花は古いセロテープカッターを机に置いて、それを眺めていた。

「智花」

「なに」

「宮下と森下が、僕の家遊びに来ている」

「宮下くんは知っているけど、森下は知らないわ」

「森下は、サッカー部で、アンパンマンに顔が似ている」

「森下くん」

「そう。宮下と森下が、智花を呼べって、僕に言った」

「男の子は、えらそうね」

「智花を野球拳で脱がしちゃおうって、僕に言った」

「智花はちょっとむっとした。」

「どうして、わたしが、そんなことをしないとイケないの」

「宮下と森下は、智花の裸が見たいんだと思う」

「伸時も、わたしの裸が見たいの」

「僕は、そうでもない」

「わたしは、服を脱ぐのは、いや」

「智花は僕の鼻を見ていた。僕は智花の目の下を見ていた。」

「いまは冬だから、服を脱ぐには寒すぎるし、宮下くんと森下くんに裸を見られるのは、恥ずかしいもの」

「わかった。そう言う」

「僕は自分の部屋に戻ろうとした。」

「帰る前に、これを見て」

「智花はセロテープカッターを両手で持った。」

「屋根裏部屋でみつけたの」

「古いセロテープカッター」

「古い青いセロテープカッター」

「これがどうした」

「ここを見て」

智花はセロテープカッターの刃の下を指さした。

僕はつばを飲み込んだ。

「これは……」

僕は手を伸ばしかけた。智花はセロテープカッターを僕から遠ざけた。

「さわらせて」

「だめよ」

「はがしたい」

「だめよ。わたしがはがす」

智花はセロテープカッターを机に戻して、刃の下に貼りついて乾いて茶色くなっている古いセロテープを指で撫でた。かさり、かさり、と音がした。

「それは、いつごろ貼られたテープなの」

「たぶんだけど、十年前」

「十年……」

「伸時、口からはがしたい汁が出てるわ」

僕は口を手でぬぐった。はがしたい汁は出てなかった。

「ひっかつた」

「だまされた」

智花はセロテープカッターをひっくり返した。

「底にも、古いテープが貼ってあるの」

「すごい……」

僕は手を伸ばしかけた。智花は僕の手をぱんと叩いた。

「もし伸時が、宮下さんと森下さんと遊ぶのをやめてくれたら、底のテープをはがさせてあげるわ」

僕は今年いちばん悩んだ。

「それは、できない。宮下と森下は、僕の部屋に遊びに来てから」
智花は口をすぼめた。

「底のテープを、はがさなくてもいいの？次にはがせるのは、十年後よ。十年に一度の、機会なのよ」

「仕方がないから、十年待つ」

智花は椅子から立った。

「だったら、宮下ちゃんと森下ちゃんと遊んできたらいいわ」

「うん」

「わたしは、いまからエリカにブラシをかけるから、伸時は、宮下ちゃんと森下くんが帰ったら、また来て」

「わかった」

「底のテープを、はがさせてあげるわ」

8 サッカー部に入ったからサッカーのことを考えていたら眠たくなったので歯

サッカー部に入ったからサッカーのことを考えていたら眠たくなったので歯を磨いた。洗面所で歯ブラシに歯磨き粉をつけて歯を磨いていたら母さんが洗面所に入ってきて、鏡に映った僕を見た。僕は鏡に映った母さんを見た。母さんは僕の体操服を持っていた。

「伸時、明日はマラソン大会があるの？」

「そういえば、明日はマラソン大会がある」

「ゼッケンは安全ピンで留めたらいいの？もしも縫わないといけなのなら、お母さんが縫ってあげるけど」

僕は歯を磨くのをやめた。歯を磨くのをやめて、考えた。

「わからない」

「だったら、縫っちゃうわね」

「待つて」

僕はうがいをした。うがいをしたら水と歯磨き粉の泡が混ざって流れた。

「もしもみんなが安全ピンで留めているだけだったら、僕だけが縫いつけていたら、本気で走りそうに見られるから、嫌だ」

「だったら、安全ピンでいいの？」

「でも、みんなが縫いつけてくるかもしれない。どうしたらいいかわからない」

「だったら、智花ちゃんに聞いてきなさい」

「わかった」

僕は智花の家に行った。智花の家は結構寝るのが早いから、電気が消えていた。一階に智花の父さんがいて、部屋を暗くしてひとりで2001年宇宙の旅を見ていた。

「伸時くん伸時くん、おじさんと一緒に2001年宇宙の旅を見ようよ」

「見ない」

二階に上がった。二階の廊下は真っ暗だったから、壁に手をついてちよつとずつ歩いた。僕は智花の部屋に入った。智花の部屋も真っ暗だった。僕は電気をつけた。

智花はベッドにいた。顔を上に向けて、泣いていた。

「伸時……」

「泣いてる」

「泣いてないわ」

智花は布団から手を出して、目をこすった。僕は椅子を持ってきて、智花の枕元に座った。

「智花が泣いてるときは、やさしい言葉をかける」

「やめて、かなしくなるから」

智花がまた目をこすった。僕は布団の上から智花の肩をぽむぽむ叩いた。

「エリカが死んだの？」

「不吉なことを、言わないで」

「じゃあ、誰が死んだの？」

「誰も、死なないわ」

「じゃあ、どうして、泣いてるの？」

「わたし、とてもつらい目にあつたの」

「嘘だ」

「どうして」

「枕の横に、めぐすりがある」

「ばれた」

智花は寝たままで、めぐすりを指でつまんだ。

「このめぐすりは、刺激が強すぎて、わたしの目には合わないの」

「どうして、合わないめぐすりを使う」

「もったいないもの」

「目が、疲れたの？」

「智花はうなずいた。

「目を、酷使したの」

「マッサージがいる？」

「伸時にも、めぐすりをさすわ」

智花は布団から出た。僕は椅子から降りて、絨毯に正座した。正座して顔を上に向けた。智花が僕の前髪を手でよけた。

「大きな目を開けて」

「開けてる」

「伸時は開けてるつもりかもしれないけれど、本当は怖がっているから、あんまり開いてないの」

「でも、これ以上は開かない」

「さすわ」

智花は僕のまつげをまぶたに押さえて、上の方に引き上げて、めぐすりを落とした。僕のまぶたがぴくぴく動いた。

「うっ」

「どう？」

「刺激が強すぎる」

「もう片方の目も開けて」

「うっ」

智花は僕のまつげをまぶたに押さえて、上の方に引き上げて、めぐすりを落とした。僕の首がぶるぶる震えた。

「目がしよわしよわする」

「わたしも、目がしよわしよわしてるわ」

「涙で何も見えない」

「わたしは、だんだん見えるようになってきたわ」

「うっ」

「もう帰る？」

「いま帰ると、母さんに智花に泣かされたと思われるから、まだいる」

「そっ」

9 サッカー部の練習が終わって倉庫の鍵を閉めて振り返ったら川口がいた

サッカー部の練習が終わって倉庫の鍵を閉めて振り返ったら川口がいた。今日はバレンタインなので、川口がチョコレートをくれた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

「これは、僕だけが、もらったの」

川口は首を振った。

「みんなに、あげたよ」

「宮下も」

「宮下くんにも、さっきあげたよ」

「よかった」

「どうして？」

「宮下は、川口のことが好きだから、もし僕が川口にチョコをもらったのに、宮下がもらっていなかったら、僕と宮下は仲が悪くなるから、そうならなくてよかった」

「後藤さんからは、もうもらった？」

「智花は、チョコをくれない」

「愛がないのね」

「愛はない。でも智花は、豆をくれる」

「豆？」

「節分の豆」

「なんで後藤さんは、チョコじゃなくて、節分の豆をくれるの？」

「智花は、僕が節分の豆が好きなことを知っているから、チョコじゃなくて豆をくれる」

「あたしも、節分の豆をあげたほうがよかったかな」

僕は気をつかって首を振った。

「これは、これで、結構うれしい」

「おつかれさま」

「おつかれさま」

部屋に戻ると、宮下が川口にもらったチョコを両手に持って、泣いてよろこんでいた。あんまりうれしそうにしているから、さつき僕が川口にもらったチョコもあげようとしたら、宮下に叩かれた。僕は叩かれた意味がわからなかったたので、宮下の目に指を刺した。宮下が、うぎゃあ、と叫んだ。森下が、宮下、と叫んだ。僕はチョコを食べながら家に帰った。

家でごはんを食べてから、豆をもらいに行きかけた。父さんの前を歩いたら、父さんが僕の足首を掴んできたから、僕は転んだ。
「伸時、お願いだから、智花ちゃんから、父さんの分のチョコもらってきてよ」

「智花は、父さんのことが嫌いだから、父さんにあげるチョコを用意していないと思う」

僕は父さんの手を蹴って離して、畳を這って玄関に行って外に出て、智花の家に行った。

智花は智花の家の居間のこたつにいた。智花の父さんとしりとりをしていたが、僕を見るとしりとりをやめてこたつから立って二階に上がった。僕も智花のあとをついていった。

智花の部屋に着くと、智花はベッドに座った。僕は智花の前に立った。智花の髪の毛がつるつるしていた。

「智花はもう、お風呂に入った」

「わたしはもう、お風呂に入ったわ」

「何風呂だった」

「フィンランド・バスソルト」

「今年も豆をもらっ」

「机の上」

僕は机の上を見た。机の上には節分の豆が二袋おいてあった。僕は節分の豆を二袋取ってきて、ひとつを智花に渡して、もうひとつを持ったまま、椅子に座った。智花は豆を食べ始めた。僕は暖房を

つけた。

「伸時は今日、誰かにチョコをもらったの」
「もらった」

「誰にももらったの」

「川口と中野と今井」

「そんなに……」

智花が驚いていた。

「そんなに、もらったの」

「そんなに、もらった」

「新記録ね」

「ニューレコード」

「もう、食べた？」

「中野と今井のは、もう、食べた」

智花が強い目をした。強い目をして豆を食べた。

「どうして、川口さんののは、食べてないの？川口さんののは、大事なの？」

「三つも食べると、ごはんが食べられなくなるし、豆も食べられなくなるから、明日食べることにした」

「そんなこと言って、本当は川口さんののは大事だから、食べないで、大事に取ってるんじゃないの？」

「そうじゃない。智花が食べたいのなら、取ってくるけど」

「わたしも、来年は、伸時にチョコをあげたいわ」

「いない」

「どうして」

「智花は、僕がチョコより豆が好きなのを知っているのに、それでもチョコをくれるとしたら、それは智花の嫌がらせだから、智花のチョコなんかいらない」

「ひどい……」

「川口のチョコを、智花にあげる」

「ばか」

智花は僕に豆を投げた。豆が僕の顔の真ん中に当たって、絨毯に落ちた。僕は豆を拾って、ふうと息をかけて食べた。

「帰れ、ばか」

「帰る、ばか」

「豆返せ」

「もらったものは、返さない」

一階に下りて、智花の母さんに、父さんがおなかがすいたって言うてるから何か食べるものをわけて、と頼んだ。

「冷蔵庫の中にあるものなら、持っていってもいいわ」

僕は冷蔵庫を開けた。キウイフルーツと福神漬けと生ハムがあった。

「生ハムをもらっても、別に困らないか」

「どうぞ」

僕は生ハムを一枚はがした。エリカが生ハムを食べてしまった。僕は生ハムをもう一枚はがして、エリカに食べられないように手に挟んだ。

智花の父さんが近づいてきた。

「伸時くん伸時くん、智花にチョコレートもらったかい？」

「チョコはもらってない。豆をもらった」

「豆だけかい？」

「豆だけ。豆がいいから、毎年豆だけ。それはおじさんも知ってる」

「それはおじさんも知っているけど、だとしたら、昨日智花が作っていたチョコレートは、どこに消えてしまったんだろうね？」

「智花が、チョコレートを作っていた」

「智花は、チョコレートを作っていたわ」

智花の母さんが冷蔵庫からビールを出して飲んだ。

「夜中まで、一生懸命、作っていたわ。伸時くんがもらっていないのなら、あのチョコレートは、誰がもらったんでしょうね」

僕は生ハムをエリカに食べさせた。

もう一回二階に上がって、智花の部屋に入った。智花はベッドにうつぶせになっていた。

「智花」

「また来た」

「泣いてる」

「泣いてないわ」

「めぐすり」

「めぐすりも、使ってないわ」

僕は椅子を持ってきて、智花の枕元に座った。

「もしかして、智花は昨日僕にくれるチョコを作ってくれたのに、僕が豆がいいって言ったから、渡せなくなって、怒ってるの？」

「わたしは、昨日伸時にあげるチョコを、眠たいの我慢して作ったのに、伸時が豆豆豆言うから、渡せなくて、怒ってる。そう、そのとおり」

「ごめん、智花が作ったチョコがほしい」

「もうないわ」

「食べた？」

「ちがう人に、あげた」

「好きな人が、できたの？」

「できた」

僕は豆の袋を開けて、豆を食べた。硬かった。

「じゃあ、もう僕とは別れる？」

「別れないわ」

「どうして」

「嘘だもの」

智花は寝返りを打った。僕を見た。普通の顔をしていた。

「わたしは、伸時が、わたしが伸時にあげるためにチョコを作ったのに伸時が豆豆豆言うから伸時にチョコをあげられなくて、他の

人にあげちゃったって思ったからおもしろいなって思ったから、嘘をついてたの」

「でも、おじさんとおばさんは、昨日の夜中に、智花が一生懸命チヨコを作ってたって、言ってた」

「お父さんとお母さんは、わたしの仕込み」

「そういえば、言い方が嘘っぽかった」

「ひっかった」

「うそつき家族」

智花は僕に豆を投げた。僕は豆を口でキャッチして食べた。

「上手」

「さくさくする」

「来年も、豆でいい？」

「来年も、豆がいい」

10 日曜日で学校もサッカー部も休みなのでジョギングをした

日曜日で学校もサッカー部も休みなのでジョギングをした。僕は右サイドバックの控えなので、本物の右サイドバックが休んでいるときも走ったりしない、本物の右サイドバックにはなれないから、早起きして街の中をぐるぐる走った。寒い日曜日だったから、公園に行つて、死んだカラスを見てきた。死んだカラスは少し毛並みが悪くなっているようだった。顔の周りの毛が抜いた草みたいになっていて、おしりの方の羽根が斜めに立っていた。でもまだ寒いから、死んだカラスは死んでから何ヶ月も経っているのに腐ってなかった。死んだカラスはすでに誰かに剥製にされたのかもしれない。

それから坂道ダッシュを二十回やって、家に帰って、父さんが金魚運動をしている隣で腹筋をした。腹筋をしていたら昼になったので、父さんと母さんと三人でラーメンを食べにいった。父さんはチャーシューが好きなので、チャーシューメンとチャーシューライスを食べていた。僕と母さんは塩ラーメンを食べた。父さんは、塩ラーメンのほうがおいしそう、父さんも塩ラーメンにすればよかった、と言った。僕は父さんを見殺したけど、母さんは父さんの妻なので、父さんのチャーシューメンと自分の塩ラーメンを半分交換してあげた。

父さんと母さんは帰ったけど、僕は帰らないで本屋に行った。マンガを立ち読みしようとしたけど、ビニールが巻いてあったから読めなくて困っていると、茶色いガラスのメガネをかけている帽子をかぶった年上の男に声をかけられた。年上の男は、本屋の奥にいる男を指さした。

「あれは、二時間前のおれだ。おれがこの本を買うのを阻止してくれ」

年上の男は一万円札を一枚とメモを重ねて僕に渡した。僕はメモに書いてあることを読んだけど、何の本がよくわからなかった。

「この本が、一万円もする」

「三千八百円だが、釣りはいらぬ」

「三千八百円でも、高い」

「いいから、この金で、二時間前のおれより早く本を買え」

「どうして」

「そうしないと、世界が滅びる」

年上の男は、いなくなった。二時間前の年上の男は、料理の本のコーナーにいた。

僕は年上の男が言った意味がよくわからなかったので、誰かに電話をかけて、どうしたらいいか、教えてもらうことにした。

僕は智花に電話をかけた。

「もしもし」

「もしもし」

「伸時はいま、どこにいるの」

「いま、茶色い色のメガネをかけた年上の男に、一万円と三千八百円の本の名前が書いてあるメモを渡されて、この金で二時間前のおれより早く三千八百円の本を買え、釣りはいらぬ、そうしないと世界が滅びるよ、って言われた。どうしたらいいと思う」

「だから、伸時はいま、どこにいるの」

「分保町の本屋^{ぶんぽ}」

「いまから、わたしが行くわ」

「智花はいま、どこにいるの」

「家」

「何を、していたの」

「寝てた」

「僕が、起こした」

「わたしが行くまで、待つてて」

僕は地中海の写真集を見ながら智花を待った。智花を待っている途中で、二時間前のおれがいなくなっていることに気がついた。

智花は一時間あとで来た。水色の帽子をかぶっていた。

「わたしが来たわ」

「何その帽子」

「水色のベレー帽」

「かっこわるい」

「うるさい」

「一緒にいて、知り合いだと思われるのが恥ずかしいくらい、ださい」

「じゃあ、伸時がかぶっていたらいいわ」

「どうして」

「わたしは、伸時が水色のベレー帽をかぶっていても、恥ずかしくないもの」

智花は水色のベレー帽を脱いで、僕に渡した。僕は水色のベレー帽をかぶった。

「たしかに、これなら、恥ずかしくない」

「一万円とメモを見せて」

「はい」

智花は右手に一万円を持って、左手にメモを持った。左手のメモを読んだ。

「この本が、三千八百円もするの」

「そうみたい」

「たぶん、このメモを書いた人は、この本を自分で買うのが恥ずかしかったから、伸時にかわりに買ってもらおうとしたんだわ」

「なるほど」

智花は首を伸ばして、僕の肩の向こうをきよろしした。

「二時間前のおれは、どこにいるの」

「もういない。智花が来る前に、帰った」

「本を買われたかもしれないわ」

「まずい」

僕は、レジにいた店員にメモを見せて、この本はありますか、と訊いた。

店員は、この本はさつきまではあつたけど、さつき人が買ってたから、もうないですよ、と答えた。

僕は、レジの前で頭を抱えた。

「もうだめだ、僕のせいで、世界が滅びる」

智花が僕の背中を叩いた。

「そんなに、自分を責めないで」

「智花……」

智花がもう一回、僕の背中を叩いた。

「たぶん、その一万円とメモをくれた人は、頭が狂っていたの」

「そう言われてみると、そうかもしれない」

「どこか、おかしいところはなかった」

「茶色いメガネをかけていた、おかしい」

「おかしい」

後ろに列ができていたので、僕と智花は気をつかって、レジから離れた。僕はメモをゴミ箱に捨てて、一万円をどうしようかと考えた。

「一万円は、どうしよう」

「使っちゃおう」

「何に使う」

「わたし、まだお昼を食べていないわ」

「僕は、もう食べた」

「何を食べたの」

「塩ラーメン」

「わたしは、慌てて出てきたから、おなかがすいた」

「おこる」

僕と智花は本屋から外に出た。外はかなり寒かった。

「何が食べたい」

「おでん」

「智花は、おでんが好きだった？」

「わたしは、そんなにおでんが好きじゃないわ」

「どうして、そんなに好きじゃないおでんが食べたい」

「なんとなく、おでんが食べたいような気がしたから」

「そう言われてみると、僕もなんとなく、おでんが食べたいような気がしてきた」

「寒いから」

「たぶんそう」

「おでんを、一万円も食べるわ」

「智花は、何のおでんがいちばん好き」

「ちくわが好き」

「ちくわじゃない。おでんに入っているのは、ちくわぶ」

「ちくわぶ」

「もう一回言って」

「ちくわぶ」

11 六時間目の体育がサッカーで僕は二点取った

六時間目の体育がサッカーで僕は二点取った。一点目はペナルティエリアの左側までドリブルをしてから、ゴールの左隅に転がして入れた。二点目は左からワンバウンドで来たクロスに右足で合わせてキーパーの手をはじいてゴールの上の方に入れた。それで僕はとてもいいイメージを持ってサッカー部に行ったのに、今日の練習はコーナーキックで、レギュラーのチームが攻撃で、控えのチームが守備だった。せっかくなのでいいイメージがあるのだから、今日は攻撃がしたかったけど、僕は右サイドバックの控えなので、守備をした。守備をしているときにキャプテンに押されたので、僕はキャプテンの目に指を刺した。キャプテンは、山田、いまはいいけど試合中にそれをするとはレッドカードものだぞ、と言って目をこすった。僕は、キャプテン、僕は右サイドバックの控えなので、試合に出る前からレッドカードものですよ、と言った。キャプテンは、ちがうちがう、山田、それはちがうぞ、と言いなからヘディングをした。僕はキャプテンがヘディングしたシュートを背中でブロックした。

家に帰る前に、宮下と森下と三人で豚丼を食べてから、家に帰った。家に入ると居間のこたつで、父さんと、智花の父さんと、智花が、三人で2001年宇宙の旅を見ていた。

智花の父さんがテレビを一時停止して、僕にあいさつをした。

「伸時くん伸時くん、もうごはんを食べたの？」

「豚丼を食べてきた」

「おいしかったかい？」

「早かった」

父さんが僕の肩を何回も叩いた。

「父さんは、豚丼よりも、早いぞ」

「わたし、おじさんが喋ると、何か知らないけど、いらいらするわ」

智花がため息をついて、こたつから出て帰ろうとした。僕は歩きかけた智花の右足の靴下のかかとに、大きな穴が開いているのを見た。父さんと、智花の父さんも、同時にみつけた。みんなで智花のかかとを見ていたら、智花は膝を曲げて足をくっつけて、かかとが見えないようにした。

「そんなに、見ないで……」

僕は智花の父さんを見た。

「智花の家は、意外と貧乏だった」

智花の父さんは首を振った。

「うちは、結構金持ちだよ」

「どうして結構金持ちなのに、智花に穴の開いた靴下を履かせる」

僕は智花の父さんの首を絞めた。

「この、甲斐性無し」

「やめて、伸時」

智花が僕の髪の毛をひっぱった。

「お父さんは、悪くない」

「じゃあ、お母さんが悪い？」

「お母さんも、悪くない。わたしが最近買った、学校に行くときに履く靴の革が硬いから、かかとがこすれて、穴が開くの」

「あの茶色い靴が、そんなに硬い」

「あの茶色い靴は、まるで軽石でできているよう」

「そんな靴は、履くのをやめたほうがいい」

「でも、デザインがすごく素敵で、わたしは気に入っているわ」

「でも、あの靴を履いていると、靴下がもたない。やわらかい革の靴を買ったほうがいい」

「そんなの、わたしの勝手」

智花が強い目をした。僕は下を向いた。

「おこられた」

父さんが畳に顔をくっつけて、智花のかかとを覗こうとしていた。「智花ちゃん、智花ちゃんの靴下の破れたところから見えてるかか

と、かわいいね。ちょっとピンク色で、ぶにぶにしてそうで、すくくかわいいね。ちょっと、ちょっとだけでいいから、おじさんにさせて」

父さんが智花のかかとに手を伸ばした。智花の父さんが、娘のピンチ、と言って慌てて、父さんの手を掴んだ。

智花はさわられなくて済んで、ほっとしていた。

「おじさんは、マニアックすぎて、怖いわ。隣に住んでいることが、不安になるくらい、怖いわ」

「でも、僕も、智花の靴下の破れたところから見えてるちょっとピンク色のかかとは、かわいいと思う」

智花は嫌そうな顔をした。

父さんはうれしそうな顔をした。

「伸時も、父さんの気持ちが、わかるようになってきたか」

「なってきたかも」

「さわらせてもらえ」

「さわらせて」

僕は智花のかかとに手を伸ばした。智花は僕の手を蹴った。

「この、へんたい親子」

「うへへ」

「うへへ」

「この、マニアック親子」

12 土曜日に朝からサッカー部に行って練習をした

土曜日に朝からサッカー部に行って練習をした。家に帰ってごはんを食べて、智花の家に行つて、智花の父さんと二人でプッチンプリンをプッチンしてストローで食べていたら智花が帰ってきて、部屋に来て、と僕に言った。

僕は智花の部屋に行った。

智花はベッドに座って、紙を見ていた。

「伸時、これを見て」

「なにそれ」

僕は智花の隣に座って、紙を見た。紙には茶色と黒のしましま猫の絵と、字が、描いてあった。

「猫がいなくなつたみたい」

「『仔猫さがしています』」

「ここを読んで」

智花は猫の下に書いてある字を指さした。

「『実際の色とは異なります』」

「どうして、実際の色とは異なると思う」

僕は首をひねった。智花も首をひねった。

「たぶん、本当の色の絵の具がなかった」

「たぶん、そうね」

智花はまた紙をよく見た。僕も紙をよく見た。

「あと、電話番号が書いてないの」

「ほんとだ」

「あと、この猫は生まれて十ヶ月って書いてあるから結構大きいはずなのに、仔猫って書いてある」

「生まれて十ヶ月の仔猫は、仔猫じゃない」

「どういうことか、わかる？」

「もうわかった」

「言ってみて」

「これを書いたのは、親猫」

「あたり」

智花は猫の絵のにおいを嗅いだ。

「猫くさいわ」

僕も猫の絵のにおいを嗅いだ。

「猫くさい」

「猫だから、あんまりたくさん絵の具を持ってないの」

「絵の上手い猫」

「とっても絵の上手い猫」

智花はベッドから立った。

「仔猫をさがそう」

「さがしてどうする」

「仔猫をみつけて、猫質にして、親猫にわたしの似顔絵を描いてもらう」

智花はコートを着て、紙を持って、部屋を出た。僕もベッドから立って、一階に下りた。

智花は冷蔵庫を開けていた。僕は智花の後ろに立った。

「餌で釣るの」

「ええ」

「何で釣るの」

「これを見て」

智花は僕に紙を見せた。僕は猫の顔の前に白い四角が書いてあるのに気がついた。本当は最初に見たときから気がついていただけ、いま気がついたふりをした。

「伸時は、これは、何だと思う」

「ティッシュ」

「わたしは、チーズだと思う」

「チーズ」

「仔猫の好物」

智花は冷蔵庫からチーズを出して、コートのポケットにしまった。

「早く。お母さんにみつかり、怒られる」

「急ぐ」

僕と智花は、中学校の向こう側にある川に行った。橋の下にチーズを置いて、仔猫が食べに来るのを待った。三時間待ったけど、仔猫は食べに来なかった。

「こんなはずじゃないのに」

智花は疲れてきていた。

「たぶん、仔猫だから、こんなに遠くには来られない」

「もう、夕方になってきたから、帰ってエリカの散歩をしないと」

「今日はもう、やめにしないか」

「でも、仔猫だから、早くみつけないと、死んでしまう……、あ」

智花がチーズのほうを見た。茶色と黒のしましま猫がチーズを持つて帰ろうとしていた。チーズは釘で地面に打ち込んであるので、しましま猫は困っていた。

「仔猫があらわれた」

「仔猫があらわれた」

智花が走って仔猫の後ろに回って、抱き上げた。仔猫は、おとなしく智花に抱かれた。

「つかまえた」

僕は走って、智花と仔猫のところに行った。

「つかまったにやー」

「伸時、猫の真似をしないで」

智花は仔猫の色をいろいろ見ていた。

「絵の色と、同じみたい」

「たぶん、生みの親だから、色にもこだわりがあるんだと思う」

仔猫は智花の胸のところで丸くなって、智花の顔を見上げていた。
「仔猫、かわいい」

僕は仔猫の首の裏側のおいを嗅いだ。

「仔猫、いいにおい」

智花は仔猫の頭のおいを嗅いだ。

「ほんとう。仔猫、かわいくて、いいにおい。連れて帰りたい」

「それは、だめ」

「どうして、こんなにかわいい仔猫なのに」

「智花の家には、エリカがいるから、智花が仔猫をかわいがると、エリカがジェラシーに狂う」

「じゃあ、伸時の家で飼う」

「飼いたいけど、早く親猫に返してあげよう。きっと、食事ものを通らないほど、心配していると思うから」

僕は智花のコートのポケットから紙を出して見た。

「そういえば、電話番号も、住所も書いてない」

「だって、猫だもの」

「住所不定」

「住所不定」

「どうしたらいい」

「いまから、親猫をさがす」

13 智花と二人で親猫がどこにいるかを考えた

智花と二人で親猫がどこにいるかを考えた。僕は真剣に考えていたけど、智花はあんまり真剣に考えていなかった。仔猫の鼻を草でくすぐってあそんでいた。

「かわいい仔猫、絵を描く親猫は、どこにいるの？」

「ゼップトーキョーにいるにゃー」

「だから伸時、猫のふりをしないで」

「だったら、智花も、真剣に考えて」

智花は真剣に考えていそうな顔をしたが、別に真剣に考えているわけではなかった。

「とりあえず今日は、もう遅いから、伸時の家に仔猫を泊めて、親猫をさがすのは、明日にしたら」

僕は首を振った。

「そんなこと言って、智花は、本当は、僕の家で一晩中仔猫とあそびたいだけ」

「ばれた」

「付き合いが、長いから」

智花はコートのポケットから携帯電話を出した。

「じゃあ、仕方がないから、今日のエリカの散歩は、お父さんに行ってもらうことにするわ」

智花が智花の父さんに電話をした。智花が智花の父さんに電話をしているあいだ、僕は仔猫にチーズを食べさせた。

「もしもし、智花だけど、今日はお昼から伸時と仔猫をさがして、いまみつけて、いまから仔猫の親猫をさがすから、帰るのが遅くなります。だから、エリカの散歩に行つてあげてください。ちゃんと公園の前まで行ってあげてください。ビニール袋も持っていってください。親不孝な娘で、ごめんなさい。育ててくれて、ありがとう。さようなら、お父さん」

智花は電話を切って振り向いた。

「留守電だった」

僕は智花に仔猫を渡した。智花は仔猫をコートの中に入れた。

「仔猫カイロ、いとぬくし」

「いとぬくし」

「いとぬくし」

「どうやって、親猫をさがす」

「交番に行つて、尋ねれば、運が良ければ、親切に教えてくれる」

「そうしよう」

「そうしよう」

僕と智花と仔猫は砂^{さたん}単中学前交番に行った。智花が、交番にいた親切そうな警官に、仔猫と紙を見せて、この紙を書いたのは誰か知っているか、と尋ねた。

親切そうな警官は机のひきだしから、智花が見せたのと同じ紙を出した。

「これを持ってきたのは、大橋^{おおはし}さんだから、大橋さんここに、連れてつてあげるといいよ」

「大橋さん」

僕は智花を見た。智花は僕に耳打ちをした。

「大橋さんちは、猫がいっぱいいるから、親猫が描いた絵を、大橋さんがかわりに交番に持ってきたの」

「なるほど」

僕と智花は、親切そうな警官にお礼を言つて、交番を出た。

大橋さんちは、横に長い古い家で、僕の家からわりと近い。そういえば、猫を飼っていた気がする。

智花は僕の少し後ろをとぼとぼと歩いていた。

「わたし、大橋さんちには、行きたくない」

「どうして」

「わたし、小さいときに、大橋さんに茶道を習っていたの」

「茶道教室」

「大橋茶道教室。でも、茶道は、わたしにはまだ早い気がして、二ヶ月でやめちゃったの。それ以来、大橋さんには、会ってないから」

「いつのはなし」

「二年生のとき」

「小学校の」

「そう」

「もう忘れてる。いまの智花は、小学二年生には見えないから、きつとばれない」

「そうね」

大橋さんの家の門の前でインターホンを押した。智花が、お宅の仔猫を預かっている、返してほしければここを開ける、と言った。

大橋さんと太ったしま猫が玄関から出てきて、門を開けた。僕と智花は緊張した。

「猫は？」

僕は智花のコートのボタンを外した。仔猫があらわれて、大橋さんを見て鳴いた。

大橋さんが仔猫を抱き上げた。

「おかえり、ちびちゃん」

「ちび」

「普通の名前」

大橋さんは、ちびを太ったしま猫に渡した。太ったしま猫は、ちびの顔をぺろりと舐めた。

「この猫が、ちびのお母さんですか」

「そうなの、ころちゃんよ」

「ころちゃん……」

智花がつばを飲み込んだ。

「ちびちゃんをみつけてくれて、ありがとうね。本当に、ありがとう」

うね。お礼がしたいから、上がって、上がって」

僕は智花を見た。

「どうする」

「お言葉に、甘える」

大橋さんの家の部屋は、全部和室だったので、僕と智花は、座布団の上に正座した。大橋さんは、黒蜜ときなこのかかったくず餅と、緑茶を持ってきた。僕と智花は、くず餅を食べながら、緑茶を飲んだ。

「おいしい？」

「おいしいです」

「おいしいです」

僕と智花と大橋さんの周りを猫たちがわらわらと囲んでいた。ちびと、ころも、僕と智花と大橋さんの近くにいた。

「ちびちゃんはまだ小さいのに、一週間も帰らないから、もう帰ってこないんじゃないかと思っていたのよ」

「そうですか」

僕は緑茶を飲んだ。智花は、絵のことを切り出してくて、うずうずしていた。

「ちびちゃんの絵を描いたのは、誰ですか」

「私」

「え……」

智花がびつくりした。僕は、そんなことだろうと思っていたので、びつくりしなかった。

「大橋さんが、描いたんですか……」

智花の声が少し震えていた。

「上手じゃないから、恥ずかしいわ」

「ころちゃんじゃ、ないんですか……」

智花がっかりした。僕は智花の肩を二回叩いて、元気をつけた。

「それにしても、智花ちゃん、大きくなったわね」

「え……」

智花がまたびつくりした。僕も少し、びつくりした。

「わたしのこと、覚えているんですか」

「もちろん、忘れたことはないわ。あの頃から、かわいくて賢い女の子だったけど、とつてもきれいな、優しい娘さんになったわね」

智花は、照れながら、困っていた。

「あのときは、すぐにやめちゃって、ごめんなさい」

智花は大橋さんに頭を下げた。

「いいのよ、いいのよ」

「わたし、茶道は、楽しかったです」

大橋さんは急須を取ってきて、僕と智花の湯飲みに緑茶を足した。

「あなたは、伸時くん」

「どうして、知っている」

「智花ちゃん、教室をやめるとき、なんて言ったか、覚えてる？」

「覚えてるけど、覚えていないことにします」

「伸時くんとおそぶ時間が減るから、茶道教室なんかやめる、って、言っただの」

「言わないで……」

「智花は、そんなことを、言っただの」

「言ってない」

智花は僕の首にクロスチョップをした。

大橋さんは、智花が僕にクロスチョップをするところが見られてうれしかったみたいで、部屋を出ていった。ちびと、ころと、他の猫たちが、大橋さんのあとをついていった。大橋さんは、白い封筒を二つ、持ってきた。

「これ、少しだけど、ちびちゃんをみつけてくれたお礼ね」

大橋さんは、僕と智花の前に白い封筒を差し出した。僕は、自分で少しと言うことは、実は二万円くらい入っているのだなと確信した。僕が白い封筒を受け取るうとすると、智花が、こら、と言って、黒い楊枝で僕の手を刺した。僕は、うぎゃあ、と言いそうになったけど、他人の家なので我慢した。

「お礼は、いりませんけど、似顔絵を描いてください」

大橋さんが首をかしげた。

「似顔絵？」

「智花、大橋さんは、猫じゃない」

「伸時、やっぱり、おじさんに似てきた」

僕は、僕が喋るといらいらするという意味だと思ったので、喋るのをやめた。

「わたし、この絵を描いた誰かに似顔絵を描いてもらいたかったから、ちびちゃんをさがしたの。だから、大橋さんが、似顔絵を描いてください」

大橋さんは、智花と、僕を、順番に見た。

「そんなことで、いいの？」

「はい」

「はい」

「待ってて」

大橋さんはまた部屋を出て行った。またちびと、ころと、他の猫たちが、大橋さんのあとをついていった。智花は、髪型が乱れていないかを気にしていた。大橋さんは、色紙とえんぴつと色えんぴつを持って戻ってきた。色紙は二枚あったから、僕も似顔絵を描いてもらえるようだった。

「人の絵は、あんまり描いたことがないから、緊張するわ」

大橋さんは一時間かけて、僕と智花の似顔絵を描いてくれた。僕と智花はそれをもらって、お礼を言って、大橋さんの家から出た。

智花は最後に、ちびを抱いて、においを嗅いでいた。智花がちびのにおいを嗅いでいるあいだ、僕は智花の似顔絵も持っていた。玄関まで見送りに来てくれた大橋さんが、また遊びに来てね、と言った。

智花がちちゃんと立って、大橋さんを見た。

「大橋さんは、まだ茶道を教えてますか」

「教えているわ」

智花は迷っているみたいだったが、僕にも、大橋さんにも、智花

の考えていることがわかった。

「大橋先生……、茶道がしたいです……」

「いつでも、いらっしやいね」

「はい、今日は、帰ります」

「気をつけてね」

帰り道、智花は僕の斜め後ろをぼんやりしながら歩いていた。僕は歩くスピードを落として、智花が隣に来るようにしたが、智花も歩くスピードを落としてしまった。僕が止まったら、智花も止まって、僕を見た。

「大橋さん、いい人」

「そうね、すごく、いい人」

「智花は、茶道をやる」

「わたしは、茶道をやる」

「どれくらい、やる」

「ときどき、やる」

僕が歩き出したら、智花も歩き出した。

「大橋さんに描いてもらった似顔絵を見せて」

僕は歩きながら智花に似顔絵を渡した。

智花は歩きながら僕の似顔絵をじっと見た。

「暗いから、よく見えないけど、似ている」

「明るいところで見ると、もっと似ている」

「大橋さん、絵が上手」

「画伯」

「でも、やっぱりちがう」

「僕も、そう思っていた」

智花は僕に似顔絵を返して、僕に自分の似顔絵を見せた。僕は智

花の似顔絵をよく見た。

「智花のも、ちがう」

「うん」

「似顔絵の智花は、笑ってる」
「似顔絵の伸時も、笑ってる」
「実際の表情とは、異なります」
「実際の表情とは、異なります」

13 智花と二人で親猫がどこにいるかを考えた（後書き）

最終回っぽい話が書けたので、これで終わりにします。

また続きを書くような気がします。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8693j/>

山田伸時 / 後藤智花

2010年10月8日11時53分発行